

鬼六

楠山正雄

青空文庫

ある村の真ん中に、大きな川が流れていました。その川は大へん流れが強くて速くて、昔から代々、村の人が何度橋をかけても、すぐ流されてしまいます。村の人たちも困りきつて、都で名だかい大工の名人を呼んで来て、こんどこそけつして流れない、丈夫な橋をかけてもらうことにしました。

大工はせっかく見込まれて頼まれたので、うんといつて引き受けてはみたものの、いよいよその場へ来てみて、さすがの名人も、あつといつて驚きました。ひつきりなし、川の水はくるくる目の回るような速さで、渦をまいて、ふくれ上がり、ものすごい音を立ててわき返っていました。

「このおそろしい流れの上に、どうして橋がかけられよう。」

大工は、こう独り言をいいながら、ただあきれて途方にくれて、川の水をぼんやりながめていました。

すると、どこからか、

「どうした、名人、そこで何を考えている。」

「という者がありました。」

大工が驚いて、見まわすとたん、水の上にぶく、ぶく、ぶくと大きな泡が立つたと思うと、おそろしく大きな、鬼のような顔がそこにぽっかりあらわれました。

大工は、妙な、気味の悪いやつが出て来たと思ひながら、わざとへいきで、

「うん、おれか。おれは頼まれたから、この川に橋をかけようと思つて考えているのだ。」
「いいました。」

すると鬼は顔じゆう口にして、ぎえツ、ぎえツ、ぎえツと、さもおもしろそうに笑いました。そうして、大きな歯をむき出したまま、

「ふ、ふ、ふ、お前、いくら名人でも、大工にやあこの橋はかからないぞ。」
「いいました。」

「じゃあ、だれならかかる。」

「そりやあこのおれならかかるよ。」

「じゃあ頼む、お前さん後生だ、代わりにかけておくれ。」

「そりやあかけてやつてもいいが、何をお礼にくれる。」

「そりやあかけてくれればなんでも上げるよ。」

「じゃあお前、その目玉をよこせ。」

「なに、目玉だ。」

大工もこれには少し驚きましたが、なにその時はその時でどうにかなるだろうと思つて、

「よし、よし、お安い御用だ。」

といつて、承知してしまいました。

二

大工はそれなりうちへ歸つて、ゆつくり一寝入りして、あくる日また、何気なしに川へ出てみました。すると、川の水は一向引いていませんが、まさかと思つていた橋が、半分以上も、みごとにその上にかかっているので、びっくりしました。

「こりやあじようだんじやあないぞ。」

大工は急にこわくなつて、そつと両方の目をおさえました。

そこでその明くる日は、朝早くから起きて、また川へ出てみますと、まあどうでしょ

う、じつにりつぱな橋が、何丈という高さに、水が渦巻き逆巻き流れている大川の
上に、もうすっかり出来上がって、びくともしずくに、長々とかかっているではありませんか。
大工はこんどこそほんとうに度肝を抜かれて、ただもう目ばかりきよろきよろさせ
ていました。

すると、そのとたん、れいのどことも知れない川のそこから、

「おい、どうした、大工。さあ、目玉をよこせ。」

といいながら、鬼が出て来たので、「ひやあ。」と一声、すっかり青くなって、ぶる
ぶるふるえ出してしまいました。

「ああ、ごめんなさい、すぐは困る。しばらくお待ち下さい。」
大工は泣くようにいつて、あわててそこを逃げ出しました。

三

逃げ出したものの、どうする当てもないので、今にも鬼が追っかけて来るかはら
しながら、川の岸をはなれて山の方へどんどん逃げて行きました。

逃げ出して、山の中をあてもなくうろろ歩いていきますと、どこか遠くの林の中から、子供の歌う声がしました。やがてその声はだんだん近くなつて、つい聞くとともにしに、耳にはいつてきたのは、こういう歌でした。

鬼六 どうした、

橋かけた。

かけたらほうびに、

目玉、早もつて来い。

この歌を聞いて、大工はほつとしました。そうして生き返つたように、元気をとりもどして、宿屋に帰つて寝ました。

その明くる日、大工がまた川へ出ると、鬼はさつそく出て来て、

「さあ、すぐ、目玉をよこせ。」

といいました。

「まあしばらくお待ちください。どうもこの目をとられては、あしたから大工の商売ができません。かわいそうだとおぼしめして、何かほかのお礼でごかんべん願います。」

こう大工がいうと、鬼はおこつて、

「何なんといういくじのないやつだ。じゃあためしにおれの名なを当あててみる。うまく言いい当あてたら、かんべんしてやらないものでもない。」

といいました。

そこで大工だいこくは、わざとまずでたらめに、

「大江山おおえやまの酒顛童子しゆてんどうじ。」

というと、鬼おにはあざ笑わらって、

「ちがう、ちがう。」

と首くびを振りました。そこでまたでたらめに、

「愛宕山あたごやまの茨木童子いばらきどうじ。」

というと、鬼おにはよけいおもしろそうに、

「ちがう、ちがう。」

と行って笑わらいました。

それから、まだいくつも、いくつも、でたらめな名なをいって、鬼おにがだんだん飽あきて、こわい目玉めだまをむいて、今いまにも飛とびかかって来きそうになったとき、大工だいこくはありったけの大きな声こえを張り上げて、

「鬼六。」

とどなりました。

「ちえッ。山の神かみに教おそわったか。」

こういったとたん、ふつと鬼おにの姿すがたは消きえて無なくなりました。

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鬼六

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>